

＜小学校 国語＞

論理的な文章を書く力を育む指導の工夫

——デジタル教材及びワークシートを活用した報告文を書くことを通して——

西原町立西原小学校教諭 玉 城 靖

I テーマ設定の理由

現代社会の知識基盤社会化やグローバル化の中で、異なる文化や文明との共存が求められている。このような社会の担い手となる子ども達にとって、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を基盤とした「思考力・判断力・表現力等」の育成が重要であるとし、その一つとして各教科の各領域において「言語活動の充実」が求められるようになった。また、言語活動の充実に関する指導事例集「小学校版（文部科学省）」では「国語科で培った能力を基本に（中略）言語活動を充実させる必要がある。」とあり、国語科指導の充実が求められている。

国立教育政策研究所は、「平成24年度全国学力・学習状況調査」の小学校国語科の結果を受け、「調査結果のポイント」として、国語科各領域の成果と課題を挙げている。しかし、その中で「書くこと」の領域については、課題のみが挙げられており、他領域に比べてこれまで以上の指導改善が求められている。

「平成 24 年度全国学力・学習状況調査（国語科）」の各領域における本校 6 年生と全国の正答率の差を比較すると、「話す・聞く」国語 A+1.9 ポイント、B-1.0 ポイント、「書くこと」国語 A-2.5 ポイント、B-8.6 ポイント、「読むこと」国語 A-0.6 ポイント、B-3.3 ポイント、「言語事項」国語 A-0.8 ポイント、B-1.8 ポイントとなっており、「話す・聞く」「読むこと」「言語事項」に比べ、「書くこと」の領域において全国との大きな差異が見られた。また、本校 3 年生及び 5 年生の「平成 24 年度沖縄県学力到達度調査（国語科）」の「書くこと」の領域においても、県平均と 3 年生で-1.4 ポイント、5 年生で-9.3 ポイントと他の領域に比べ大きな差異が見られた。これらのことから、本校の児童は「書くこと」の領域に課題があることがわかった。

また、これまでの実践を振り返ると、「書くこと」の中でも、報告文を書く場面で、「文章構成」や「言葉の特徴やきまりに関する事項」に課題をもつ児童が多くみられた。その文章では、特に段落相互の関係が成り立っていない文章や、書く目的や必要に応じて理由や事例が挙げられていない文章といった「文章構成の課題」、主語と述語の不一致や助詞の誤り、修飾語不足などの「言葉の特徴やきまりに関する事項」に課題が多くみられた。このことから、文章構成の指導を充実させるための「デジタル教材開発及び関連するワークシート」と、言葉の特徴やきまりについて、学年の系統性をふまえながら繰り返し指導できる「系統的ワークシート」の作成が必要であると考えた。

そこで本研究では、「書くこと」領域の中でも文章構成に課題が多くみられる報告文の「文章構成及び記述に関する指導事項」と、「各学年における言葉の特徴やきまりに関する事項」についての研究を行い、報告文の文章構成を捉えさせるための「デジタル教材の開発及び関連したワークシート作成」と、個別や集団の課題に沿った指導ができるような「系統的ワークシート」を作成する。これらデジタル教材とワークシートを、日々の授業や授業と連動した書く活動において繰り返し使用することにより、報告文を書く力を育むことができるだろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

報告文を書く場面において、指導事項を系統立てたワークシートと授業用ワークシート、提示用デジタル教材を作成し、個別の課題に沿って繰り返し解かせたり、報告文の文章構成について根拠を明確にさせて話し合わせたりしながら文を書かせることによって、報告文を書く力を育むことができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 理論研究

(1) 報告文とは

学習指導要領における報告文の言語活動例として、低学年「経験したことを報告する文章」、中学年「疑問に思った事を調べて、報告する文章」、高学年「自分の課題について調べ、意見を記述した文章や活動を報告した文章」などがあげられている。

学年が進むにつれて、自分自身の経験を根拠とした書く学習から、疑問や課題に対して資料を根拠とした書く学習へと段階的に移行していることがわかる。

(2) 課題に沿った指導

① 文章構成についての指導

沖縄県教育委員会は、「わかる授業 Support Guide」（平成 25 年 10 月）」において、「わかる授業をつくる書く活動の機能」の中で「何を、どのようにかけばいいのか、目的意識をもたせて書かせること」と、書く目的と方法を明確に示して書かせることが重要だとしてあげている。また、松野(2010)は「文章構成の型にしたがって文章を書くことは、論理的な思考を鍛えていくことになる」としている。これらのことから、児童に報告文を書かせる際には、主題（目的）を意識させ、「はじめ-中-終わり」などの文章構成の型（方法）に沿って、記述されるべき物事の共通性や、順序性を児童に確実に身に付けさせる事が重要であると考えた。そのためには、文章構成の学習において、文章の共通性や順序性について考えたことを、根拠を示しながら相互に「話し合わせる活動」の充実が必要であると考えた。これを繰り返すことにより、自分の考えについて、根拠を明らかにしながら報告文を書くことができる力を定着させることができるのではないかと考えた。

② 言葉の特徴やきまりに関する事項についての指導

学習指導要領に「言葉のきまりの指導については系統的に指導する」とあるように、当該学年の指導事項に加え、前学年の指導事項や次の学年の指導事項についても必要に応じ指導する事が必要である。この指導を充実させるためには、補充的な指導を繰り返し行い、表記の仕方や語句などの言葉のきまりを理解させていくことが重要だと考える。また、その指導では、基礎的かつスモールステップに学習できるワークシートを準備することで、個々の児童の課題に沿った指導ができると考えた。

(3) 学習の系統性の重視

「国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている。」と学習指導要領で示されているように、教師は領域の指導事項や言語事項などの系統性を把握し、児童の実態に応じ適切な指導を行う必要がある。そのためには、表 1 のように前学年や当該学年の系統性のある單元ごとに指導事項を整理し、個々の指導に生かしていくべきだと考えた。

表 1 「例：書くこと 報告文の文章構成及び記述に関する指導事項 系統表」

	第 1 学年 経験報告文	第 2 学年 経験報告文	第 3 学年 調査報告文	第 4 学年 調査報告文
はじめ	いつ、どこで 何をした	いつ、どこで 何をした	疑問点「問い」 調べる目的 調べた方法	目次 調べる目的 調べた方法
中	見たこと（1 項目） したこと（1 項目） 会話文	一つの出来事について 2 項目程度の 経験を書く、会話文	調べたこと共通性 疑問点への「答え」	調べたグラフや表 から読み取った事
終わり	感想	感想	調べてわかった事 感想	調べてわかった事 感想

(4) ICT 活用のメリット

① 国語科授業における ICT 活用

国語科教育における授業デザインの重要性を強調してきた桂聖(2011)は、授業づくりにおいて内容・論理のイメージをビジュアル的にする「視覚化」、指導内容をピンポイントにフォーカスし、シンプルにする「焦点化」、課題や理解をシェアする「共有化」の3つの要件で授業を構築することが重要だと説いている。また、授業におけるICTの活用効果について中川一史(2011)は、思考の「可視化」、知識・理解を補完するための「焦点化」、大きく映すことによる「共有化」をあげている。

これらのことから、国語科の授業において、ICTを活用することにより効果的な指導が行えるのではないかと考えた。例えば、文章構成のきまりを学ぶことを目標とした学習で、電子黒板などでばらばらの文章を提示し、その構成を考える学習場面を設定する。その際、児童達は文章を挿入や抜去、並べ替えを行いながら、その共通性や順序性の根拠を説明することで自らの考え方を「視覚化」する。また、考え方を視覚化したことで、他の児童との考えの相違点に気付き、学ぶべきねらいが「焦点化」される。それによって、さらに話し合いが深まり、学びが「共有化」され児童全体の学習理解度が高まると考えた。

この他にも、ICTを活用した学習では、児童の考えを記録しておくことで、必要に応じて記録を呼び出し即座に表示できることや、その記録を使用して学習を振り返ったり、改めて比較しなおしたりすることが容易であると考えた。

② 教材共有による系統的な指導

文部科学省「教育の情報化に関する手引き」の中で、「プリントや提示資料は再利用や共有・提示ができて有益である。」としている。系統化したワークシートや提示用デジタル教材を作成し、教師がいつでも使えるようサーバに保存しておくことで、1年生から6年生までの全児童に対して、それぞれ個別の課題に沿った指導が可能になり、6年間の螺旋的・反復的な学習が可能となるのではないかと考える。

2 調査研究

(1) 児童アンケート結果

児童の書くことに関する実態を把握するため本校3年生(83名)へのアンケートを実施した。調査では、集合調査法にて質問紙を使用し補足説明を行いながら調査した。

① 「好きな国語の学習」(図1)

国語の3領域「話す・聞く」「書く」「読む」と1事項「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中で好きな学習を調査した。

その結果、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(グラフ内表示:伝国)」を好きと回答した児童が47%と半数近くおり、言葉や漢字の学習に意欲を持って取り組んでいる児童が多いことがわかった。

しかし、「書くこと」の領域については全体の2%しかおらず、好きととらえる児童が少ないことがわかった。

② 「書くときに困っていること」(図2)

この質問は、書く時に困っていることがある児童のみの自由回答とした。回答したすべての児童が、どのような事を書けばいいのかわからないといった「内容」に関すること、どのような順番で書けばいいのかわからないといった

「文章構成」に関すること、接続詞などの使い方が難しいといった「記述」に関することのいずれかの事項で困っているとの回答結果が得られた。また、この中には上記の複数事項について困っているという児童もいた。

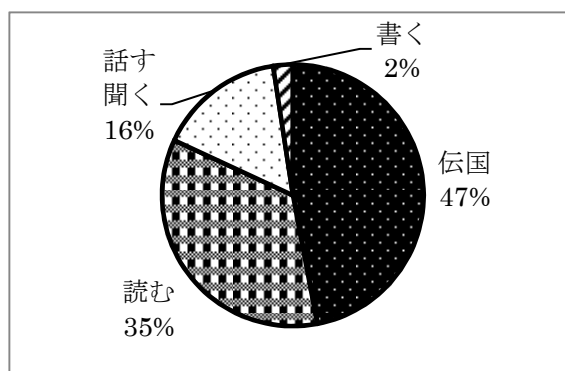


図1 「好きな国語の学習」

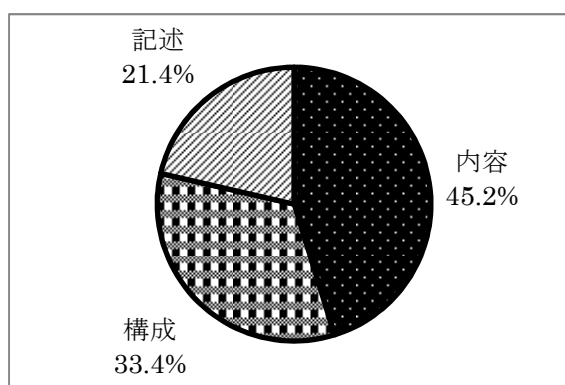


図2 「書くときに困っていること」

これらのアンケート結果から、児童達は「書くこと」に対して苦手意識をもっており、その原因として書く目的に合わせ、どの文章構成の中に、どのような内容を書きいれたらよいのかという具体的な文章の書き方の理解が不足していることがわかった。

(2) 児童の実態「作成した報告文」（5月）

本校3学年の2クラスにおいて5月の「報告文」を書く単元での、文章構成の平均は約60点であった。（P26 文章構成の判断基準と配点参照）

授業は指導計画（表2）の5「示された報告文の構成（表3）に沿って文章を書く」を目標に行われた。

目標に達することができなかった児童の文章では、「はじめ」の調べることと「中」の調べた内容が対応していなかったり、調べた内容と「終わり」の感想が混在したりするなどの特徴がみられた。

このことから、報告文を文章構成に基づいて書く事によって、自分の調べた事や考えをまとめやすくなったり、伝えやすくなったりするという構成のよさを十分に理解できず、習得できていないのではないかと考えた。

表2 「報告する文章を書こう指導計画」

1. 記号について調べ、報告文を書くことを設定する。
2. 示された報告文を読み、書き方を知る。
3. 調べたことを分類、整理する。
4. 構成表に書く。
5. 示された報告文の構成に沿って文章を書く。

表3 「報告文の文章構成」

「終わり」 調べた感想	調べたこと③	調べたこと②	調べたこと①	「中」 調べた内容	「はじめ」 調べること 調べるきつかけ 調べる方法
----------------	--------	--------	--------	--------------	------------------------------------

(3) 教師用アンケート

「書くこと」領域に関して、教師の意識及び指導の工夫や改善点などを把握するためにアンケートを実施した。

① 「書く力を高めるため系統性を意識した授業や補充指導、宿題に取り組んでいるか」（図3）

授業や補充指導、宿題で系統性を意識した書くことの指導を「あまり行っていない」「行っていない」の回答を合わせるとそれぞれ過半数を超え、指導が十分に行われていないことがわかる。

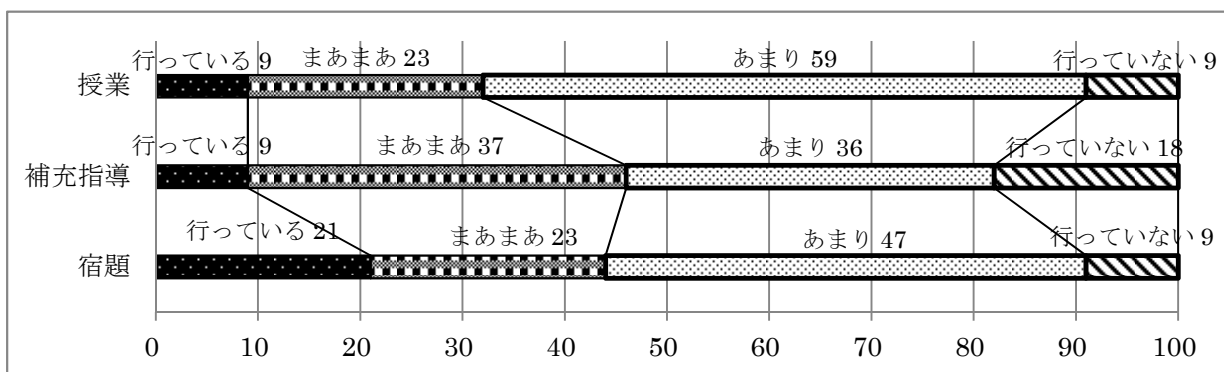


図3 「書く力を高めるため系統性を意識した授業や補充指導、宿題に取り組んでいるか」

(%)

② 「書く力を高める指導で困っていることはなにか」（自由回答）

「系統的で具体的な指導がはっきりしない」「系統的な評価がわからない」という内容の意見が89%と多く、教師自身が系統的な指導と評価について理解が不十分である。また、「個の課題が様々で対応が難しい」といった個別の支援方法について課題があるという意見も多かった。

③ 「書くことの指導の充実が図られるためには」（自由回答）

「学年ごとに指導事項が系統化された表が必要」といった指導内容についての意見と「ワークシートの作成・活用」という教材の必要性をあげる意見が多かった。

①から③の結果から、「書くこと」における指導事項の系統性が十分に理解されていない実態がうかがえる。その課題解決のために、授業や補充指導、宿題などに生かすことのできる系統表や系統的なワークシートなどの教材開発が必要だと考えた。

3 教材開発

教材については、右図の構想図をもとに開発に取り組んだ（図4）。

文章構成については、試行錯誤と話し合いを行いながら構成を学ぶための「デジタル教材」及び、その教材と連動し学習を補完するための「授業用ワークシート」を作成した。

また、言葉の特徴やきまりの定着を図るための教材として、「系統的ワークシート」を作成した。

さらに、学習上必要となる教師提示用の「関連するデジタル教材」も開発した。

(1) 文章構成を学ぶ提示用デジタル教材（図5）

報告の文章構成を学ばせるために、右枠内の文章（短冊）を操作しながら根拠をもった構成を考えることができるよう提示教材を開発した。また、児童が操作できるように、動的であらゆる端末で動作可能なHTML 5 *c と JavaScript**d を使用した。

授業では、以下のように使用する。

- ① 児童それぞれに、ばらばらの文章（短冊）と、思考し操作するための「授業用ワークシート」を配布する（図7）。
- ② 個人、ペアの順で文章の挿入や抜去及び並び替えをしながら構成を考えさせる。
- ③ 全体場で、デジタル教材を操作させながら、考えを発表させる。また、互いの考えの相違点に気付かせるために、違いのある部分を拡大し、比較させながら意見を交流させる（図6）。

④ 根拠をもとにした話し合いを行うことで、報告文に適した文章構成を共有化する。

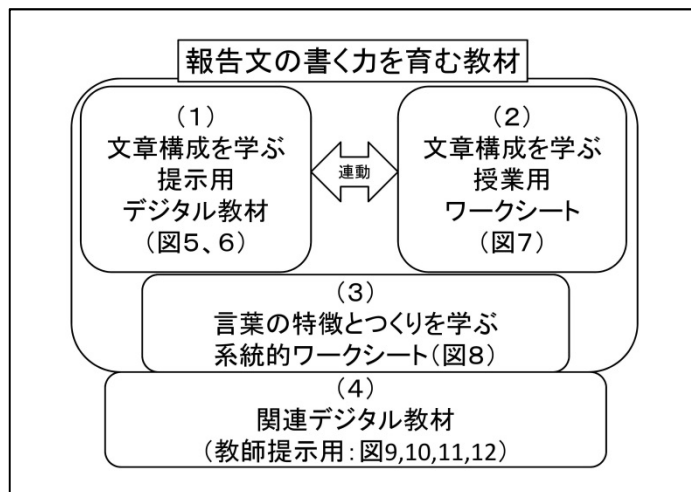


図4 教材開発の構想

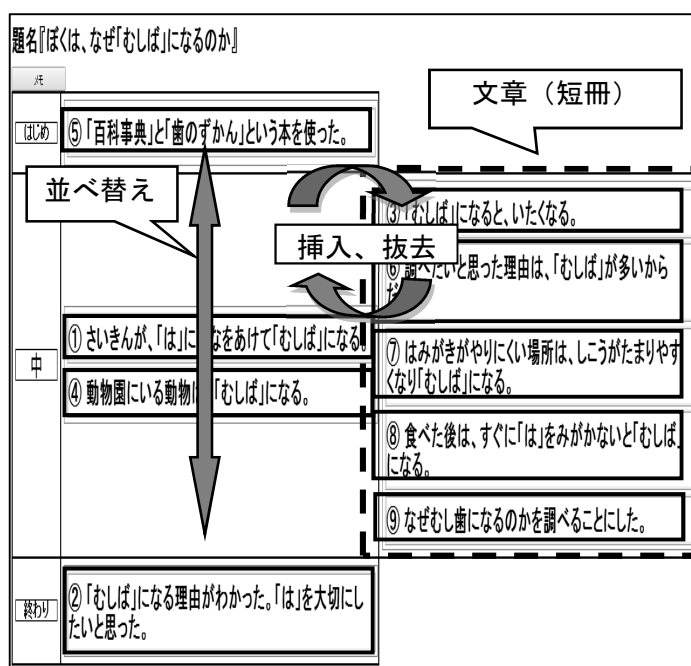


図5 文章構成を学ぶ提示教材

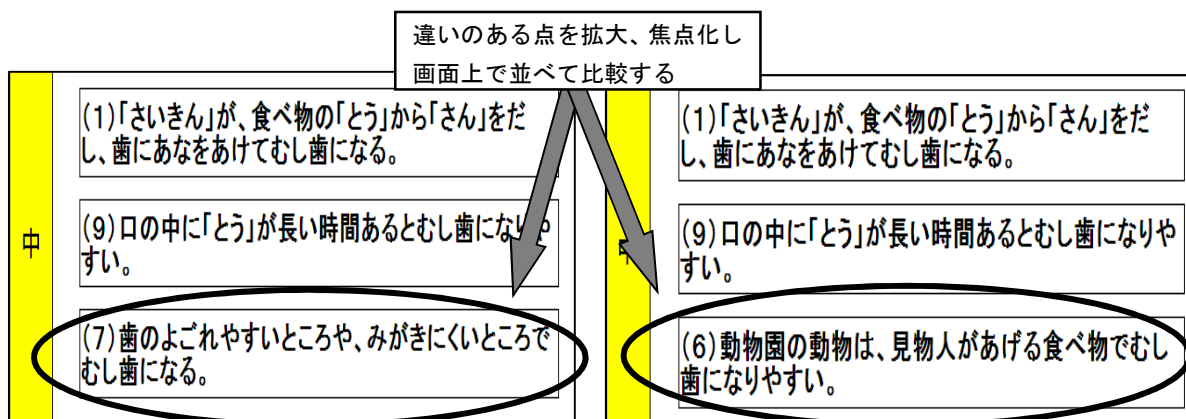


図6 文章構成を学ぶ提示教材（ちがいを拡大、比較する）

(2) 授業用ワークシート

本で調べて報告文を書く単元において、必要と考えられるワークシートを21枚作成した。このワークシートでは、開発したデジタル教材とワークシートとの関連性を高めるために構成表の様式を統一した。例えば、図7の「授業用ワークシート」は、「構成を学ぶデジタル教材（図6）」と様式を揃えており、個々の児童がワークシートを思考のテーブルとして「文章（短冊）」を操作できるようにした。また、「文章（短冊）」については、編集や任意の枚数を印刷できるようにExcelで作成した。

(3) 系統的ワークシート教材（図8）

文章を書く際に必要な「言葉の特徴やきまりに関する事項」の定着を図るために、学年や内容に応じて学習内容を系統的に配列し、137枚のワークシートを作成した。その学習内容として、「主語・述語」「助詞」「句読点」「修飾語」「文末」「接続語」「敬語・ていねい語」「指示語」の8つに分類した。

また、教師が個々の児童の実態に合わせ編集できるようにWordで作成した。

そして、ワークシートのダウンロード画面は、それぞれの学習のねらいにそった学習内容がすばやく確認できるように、ワークシートのプレビュー画面とともに、ねらいを表示するようにした。さらにダウンロードは、個別、学年、学習内容、全学年から選択できるように作成した。

図7 授業用ワークシート（文章構成を学ぶ）

図8 系統的ワークシートダウンロード画面（一部を表示）

(4) その他関連デジタル教材

① 導入用構成教材(図5類似提示教材)

スモールステップの考えに基づいて、導入場面において、本教材を使用し文と文との関係に気付かせるための教材を作成した。短文で数の少ない文章(短冊)を操作させながら学習課題に気付かせる。

② 本の違いを知る提示教材(図9)

百科事典、図鑑、科学的読み物の内容を比較させることで、それぞれの本の特徴を捉えさせる。また、その特徴をもとに調べるテーマによって本を選択するよさに気付かせる。

作成した教材は、調べるテーマを「カブトムシの概要」や「カブトムシの仲間」、「カブトムシの生活」と設定し、それぞれのテーマに沿った本は、どれがよいのかを提示した教材を見ながら話し合わせる。

ア 百科事典

「虫」についての概略が書かれており、テーマ「虫って何?」の調べ学習に適している。

イ 図鑑

「虫」のそれぞれの種類ごとに仲間が集められており、写真を多く使用している。そのため、テーマ「カブトムシの仲間」の調べ学習に適している。

ウ 科学的読み物「カブトムシのふしぎ」

「カブトムシのエサ、主な生息場所などについて詳しく書いている。そのため、テーマ「カブトムシの生活」の調べ学習に適している。

③ 事典の使い方提示教材1(図10)

百科事典全体のつくりを学ぶ教材を作成し、以下のアからオの項目について全体へ提示しながら話し合わせ、授業用ワークシートにまとめさせる。

ア 数字は巻を表す

イ 五十音順に配列

ウ 巻をまたぐ配列

エ 辞書内の言い換えの語句を調べる
例：くびかざり→ネックレス

オ 索引の使い方

④ 事典の使い方教材2(図11)

「百科事典の使い方教材1」と合わせて使用し、百科事典の「見出し」や「はしら」、「解説文」など、辞書のページ各部の名称とはたらきについて理解させる。

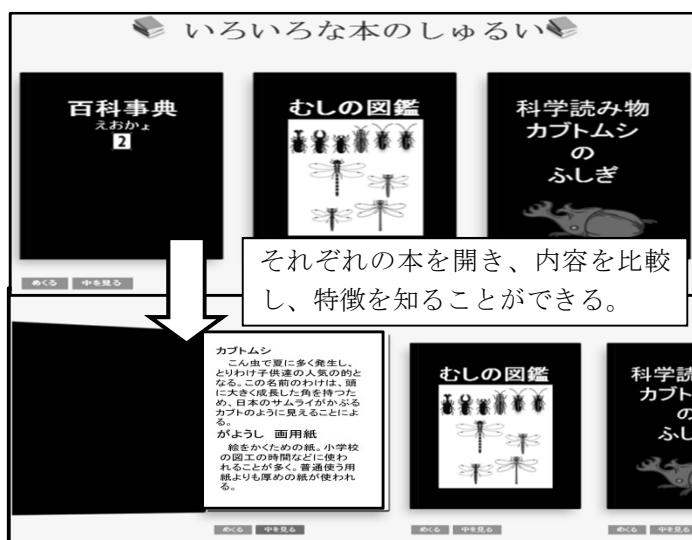


図9 本の違いを知る提示教材

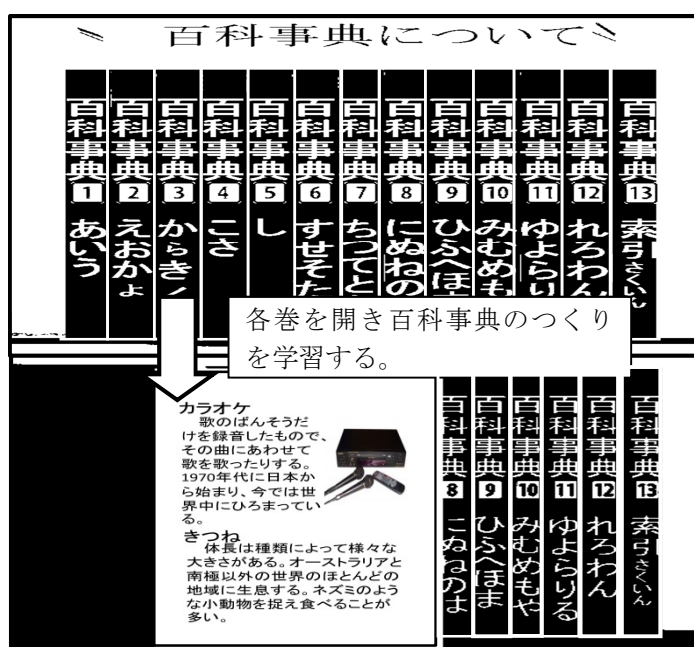


図10 事典の使い方提示教材1

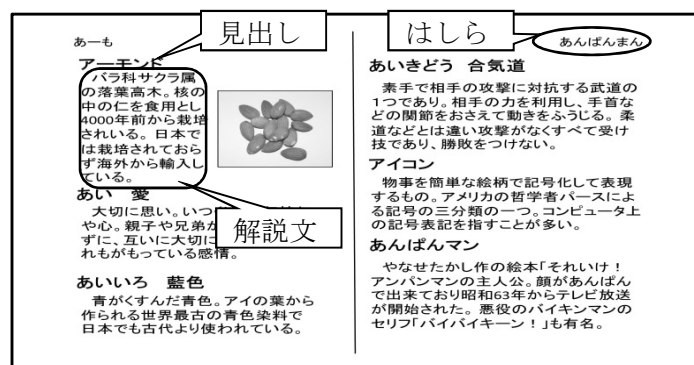


図11 事典の使い方提示教材2

⑤ 文章要約提示教材（図 12）

文章を主語と述語に注意しながら、要約していく過程を示した提示用教材を作成した。

教材には、2つの文章があり、1つ目は教師の説明を聞きながら、授業用ワークシートで要約の仕方を学ぶ文章である。2つ目は、前の文章で学んだことをもとに、全体で話し合いながら、要約していくための練習用教材として作成した。図 12 は、1つ目の文章で、テーマ「なぜむし歯になるのか」の問いへの答えとして、百科事典から調べたメモから、助詞「が」に着目し、主語「細菌が」を抜き出して要約していくことを表し説明している。

3. 本で調べたことをメモしよう

ミュータンス菌(きん)などの細菌(さいきん)が、食べ物にふくまれた糖質(とうしつ)を分解(ぶんかい)して酸(さん)をだし、歯の表面をとかし内部(ないぶ)に侵入(しんにゅう)して歯に穴(あな)をあけてむし歯になる。

4. 辞書でわからない言葉を調べよう

さいきん	ちいさな菌 (きん)	とうしつ	あまいさとうみたいなもの
ぶんかい	小さくこまかくとる	しんにゅう	中にはいること

5. メモしたことを短い文で書こう

細菌(さいきん)が、

図 12 文章要約提示教材

Ⅲ 指導の実際

1 単元名「報告書を書こう」（光村図書 第3学年 下）

2 単元目標

- (1) 生活の中から調べたいことを決め、必要な事柄について本を読んで調べることができる。
- (2) 書こうとすることの中心を明確にし、構成を考え、まとまりに分けて書く事ができる。
- (3) 自分の問いを解決するために必要な本や文章を選んで読み、文章を引用したり要約したりすることができる。

3 単元の指導計画と評価計画（※本時：太字、下線）

次	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法	授業用ワーク以外に個々の課題に応じて系統的ワークシートを 補習や家庭学習で取り組ませる。（図8教材）
第一 次	①学習計画を知り学習課題をたてよう。 ②デジタル教材で事典や図鑑の使い方を知り、与えられた問いについて調べる。	①単元全体の見通しをもたせる。 ②調べる本の違いや、事典は、目次や索引、背表紙から探したい言葉を検索できることをデジタル教材で提示し、理解させる。（図9、10、11 提示教材）	〔関〕単元の課題を捉えている（授業用：課題ワーク） 〔言〕事典や図鑑などからの調べ方を知り調べている。（授業用：事典調べワーク）	
第二 次	③百科事典の中の文章から主語と述語を捉え、短くまとめる方法を知る。（授業用：要約ワーク） ④ワークシートで個々に文章（短冊）を操作しながら構成を考え、ワークシートにその根拠を書く。（図7教材）デジタル教材を操作し文章構成について話し合う。（図5 提示教材）	③提示用教材で、主語と述語に着目させながら、調べた文章の要点を捉えさせ短くまとめさせる。（図12 提示教材） ④デジタル教材「はじめ」「中」「終わり」の各項目に必要な事柄について理解させる。（図5 提示教材）	〔書〕文章の中から必要な語句を取り出し短文にまとめることができる。（授業用：要約ワーク） 〔書〕報告文の構成に沿って「はじめ」「中」「終わり」の書く内容について理解している。「中」において「問い」と「答え」を対応させながら文章を構成できる。（図7教材）	

第二 次	⑤構成をもとに書く練習をする。	⑤構成したワークをもとに書き表し方を示す。横書きの作文用紙の使い方を理解させる。		授業用ワーク以外に個々の課題に応じて系統的ワークシートを補習や家庭学習で取り組ませる。 (図8教材)
第三 次	⑥調べることを決め学習計画を立てる。 (児童の学習計画) ⑦「はじめ」を書く。 (作文ワーク) ⑧⑨事典や図鑑を利用して調べワークシートに書く。(事典調べワーク) ⑩⑪調べた事を要約し「中」を書く。(要約ワーク)	⑥自分で調べられることが見つけれない場合は教科書から選択させる。 ⑦第2次の授業で行った下書きを参考に書けるように支援する。 ⑧⑨目次や索引、背表紙から探したい言葉を検索できることを思い出させる。 ⑩⑪調べた文章の要点を捉えさせ短くまとめさせる。 報告文の構成で書けるように第二次5時間目の構成ワークを参考に支援する。	〔書〕疑問に思うことを明確にして決めている。 (学習計画ワーク) 〔関〕学習の見通しを持ち計画を立てている。 (学習計画ワーク) 〔言〕事典や図鑑などから調べる方法を知り調べている。 (事典調べワーク) 〔書〕図書の中から、報告文に書くための情報を集め要点を捉え短くまとめている。 (要約ワーク)	
第四 次	⑫「終わり」「使った本」をまとめる。 ⑬下書きを行う。 ⑭グループで交流する。 ⑮交流を生かして、報告文を仕上げる。 ⑯学級全体で交流する。	⑫「はじめ」「中」の内容から考えた事や感想を書くことを理解させる。 ⑬横書きの書き方を再確認させる。 ⑭「問い」と「答え」が書かれたわかりやすい報告文になっているかを確認しながら友達の文章を読ませる。 ⑮交流で知った友達のよい点と、自分の改善点を加筆・修正させながら清書をさせる。 ⑯「問い」と「答え」が書かれた報告文になっているかの視点をもたせ交流させる。	〔書〕内容ごとにまとまりをわけて書いている。 (作文ワーク) 〔書〕問いに対する答えとなるような文章を構成できている。 (作文ワーク)	

4 系統的ワークシート教材の活用

資料研究の報告文を書くためには、テーマである「問い」対する「答え」を本から探して読み、必要な情報のみになるように要約し書いていくことが必要となる。

「答え」を要約するには主語と述語について理解を深め、もとの文章から主語と述語を拾い読み、つなげる力を育むことが必要だと考えた。そこで「主語と述語」に関する系統的なワークシートを補習の時間や家庭学習で繰り返し行い指導した。また、授業の際には、学習した主語と述語の関係性を想起させながら、本から拾い読みをさせ、それをもとに要約して書くように指導した。

5 本時の指導

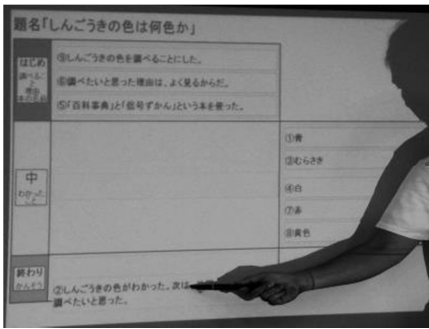
(1) 本時のねらい (4/16)

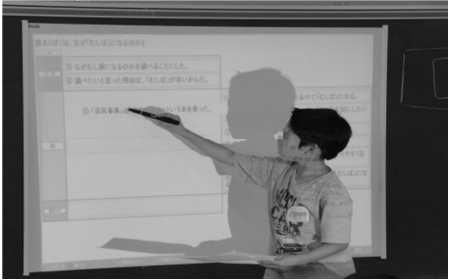
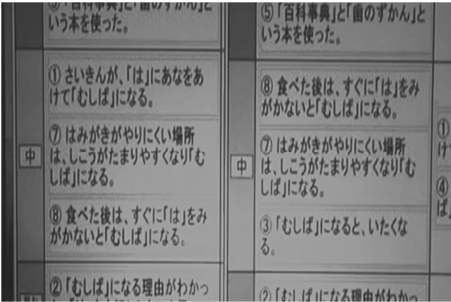
「問い」と「答え」を適切に対応させながら「はじめ」「中」「終わり」を構成する事ができる。

(2) 授業仮説

文章構成を考える場面において、授業用ワークシート(図7)を用いて個々で自分の考えを深めさせ、構成を学ぶデジタル教材(図5)を用いて、自分の考えと友達のを比較し、それぞれの考えの根拠をもとに話し合わせ合うことで、題名や文章中の「問い」と「答え」の関係に気づき、その関係を適切に対応させながら文章を構成する事ができるであろう。

(3) 本時の展開

	☆学習活動 ・予想される児童の反応	○教師支援・留意点	○ワークシート教材 ◎ICT活用目的 ・関連機器
導入	1 本時のめあてをつかむ ☆提示された文章の挿入や抜去、並べ替えて文章を構成する。 ・意味がわからない ・変な文章	○「問い」と「答え」の関係に気付かせる導入用構成教材を使用し、文章を構成させる。	◎導入用構成教材(ねらい) スモールステップ教材(提示用デジタル教材)で「題名(問い)」と「調べた事(答え)」の関係性に気付かせ、展開の学習につなげる。 ・ノートパソコン ・プロジェクタ ・電子黒板
	めあて：文章の組み立てを考えよう 	○読むことで、ばらばらの文章を組み立てるの必要性を感じさせる。	
展開	2 個人で考える 題名「なぜ、ぼくはむし歯になるのだろうか」の文章の組み立てを行う。 ☆自分の考えに沿って抜去、並べ替えをする。 	○机間指導にて、学習活動を理解していない児童がいた場合「めあて」と「内容」をつかませるよう支援する。 ○構成を考える際には「なぜなら～だと思ったから」など、段落相互の関係が説明できるように指示する。 ○考えが進まない子へ題名や「はじめ」に注目させ「問い」を意識させる。 ○選んだ根拠を書くことに戸惑いがある児童へは、選ばなかった理由を考えるように指示する。	○授業用ワークシート(文章構成を学ぶ:図7)

展開	3 共有する ☆ペアで話し合う。  ☆発表する。(視覚化)  ☆学級全体で話し合う。 (焦点化・共有化) ・題名と中が関係している。 ・「ぼく」のむし歯なので動物は関係ない。 	○互いの考えの相違点について、その理由を説明しあうように指示する。 ○文章内の語句や段落相互の関係に根拠をもった説明ができるように「なぜそう思ったのか」と理由を発表させるように指示する。 ○デジタル教材を操作しながら、説明させることで、発表児童の考えを視覚化し、他の児童が自分自身の思考と比較できるようにする。 ○意見の違いのあるところを拡大し焦点化することで、話し合いの論点を絞らせる。 ○考えの違いの根拠を話し合わせることで、「問い」と「答え」の関係性に気づかせるとともに共有化を図る。	◎文章構成を学ぶデジタル教材(図5) (ねらい) 報告文の構成について、全体で話し合う場面において文章(短冊)を操作しながら、根拠をもった文章構成を考えることができるようにする。 ・ノートパソコン ・プロジェクタ ・電子黒板
まとめ	4 まとめ ☆授業を振り返りノートにわかったことをまとめる。 ・「中」には、「はじめ」や題名にある「問い」に答える文を書く。	○めあてを振り返らせ「文章の組み立て」に必要な考え方をまとめさせる。 ○次時予告をする。	○授業用ワークシート(文章構成を学ぶ:図7)

(4) 評価 「問い」と「答え」を適切に対応させながら「はじめ」「中」「終わり」を構成する事ができたか。

6 仮説の検証

本研究では、報告文の構成を学ぶ授業において、デジタル教材を使用することによって、児童が「問い」と「答え」を適切に対応させながら「報告文の文章構成」に沿った文章が書くことができたかを検証する。

また、系統的ワークシートを補習や家庭学習に活用することによって、主語と述語の4つの文型に照らし合わせて、正しく書くことのできる力を育むことができたのかを検証する。検証では、「ICT活用あり」と「ICT活用なし」の2クラスにおける文章構成の比較、同集団における報告文(5月、9月)に書かれた「主語と述語」のつかい方の変容から「報告文の書く力を育む指導」として有効であったかを検証する。

(1) 文章構成についての検証と考察

文章構成についての仮説の検証は、「ICT活用あり」(Aクラス)と「ICT活用なし」(Bクラス)の児童が書いた報告文を「文章構成の判断基準と配点(表4)」に照らし合わせて100点満点で評価しその平均点を比較した。また、両クラスの5月と9月の平均点の変化についても比較した。

① 文章構成の判断基準と配点

報告文に求められる文章構成である「はじめ」「中」「終わり」の書く内容ごとに、判断基準を設け数値化し評価した。また、「はじめ」と「おわり」については部分点の合計で採点を行い、「中」においては達成状況に応じた評価を行った。

表4 「文章構成の判断基準と配点」

文章構成	書く内容	判断基準	配点
はじめ (40 点)	調べること (問い)	題名と同じ内容の「調べること」が書かれている。	20 点
	調べる動機 (きっかけ)	調べる動機が書かれている。	10 点
	調べる方法	調べる方法について書かれている。	10 点
中 (30 点)	「調べる事 (問い)」に対応させて「わかったこと (答え)」を書く。	「調べる事 (問い)」に対応した「わかったこと (答え)」が書かれている。	(30 点)
		「調べる事 (問い)」に対応した「わかったこと (答え)」は書かれているが、重複した内容や関連性の低い内容が書かれている。	(20 点)
		「調べる事 (問い)」に対応した「わかったこと (答え)」は書かれているが、関連性のない内容が書かれている。	(10 点)
		「調べる事 (問い)」に対応した「わかったこと (答え)」が書かれていない。	(0 点)
おわり (30 点)	「中」の「わかったこと (答え)」をまとめ書く。	「中」の「わかったこと (答え)」が書かれている。※中の内容には左右されない。	15 点
	調べてわかったことに対する考えを書く。	調べてわかったことに対する考えが書かれている。	15 点

② 「ICT活用なし (Aクラス)」と「ICT活用あり (Bクラス)」の文章構成における平均点の比較

「ICT活用なし」のAクラスの平均点が、90点であるのに対し、「ICT活用あり」のBクラスの平均点は98.6点となっており8.6点の差異がみられた。また、両クラスにおける5月と9月の平均点の差を比較すると、Aクラスが31.1点、Bクラスが38.6点となっており、Bクラスの平均点が7.5点高いことがわかった(図11)。

両クラスの9月に書いた報告文の「はじめ」「中」「終わり」に記述された内容の平均点を比較した場合に、「はじめ」と「終わり」については、大きな差異がみ

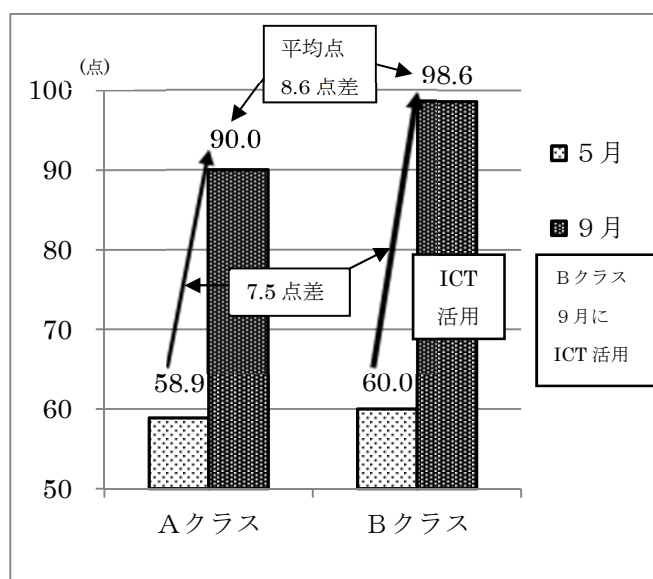


図11 文章構成の平均点

られなかったが、「中」の構成において「ICT活用なし」のAクラスの平均が21点、「ICT活用あり」のBクラスが28点と7点の差異がみられた（図12）。

これらの結果から、デジタル教材を使用し、比較・検討すべき2つの文章を視覚化・焦点化したことで、報告文の適切な文章構成の仕方について根拠をもった話し合いができたため、学習理解が深まったと考えた。

また、紙媒体での提示用教材に比べ、デジタル教材を使用した授業では、表示の切り替えや、視覚化・焦点化する時間が短縮され、個々の児童が思考する時間や、意見の違いを比較・検討し共有する時間（約4分）を確保することができたことで、多くの児童が学習のめあてを達成したのではないかと推察した。

さらに、スモールステップ教材を授業の導入部分で使用し、文章（短冊）を操作することで、文章構成の「はじめ」「中」「おわり」の役割のちがいや、「問い」と「答え」の関係性に気づき、文章を構成する際に必要な文と文との関係について理解を深めることができたのではないかと考えた。

(2) 「言葉の特徴やきまりに関する事項」についての検証と考察（図13）

言葉の特徴やきまりに関する事項について、「主語と述語に関する系統的ワークシート」の使用前（5月）と使用後（9月）の報告文から、主語と述語の4つの文型に照らし合わせて、正しく書くことができている児童の割合を比較した。

5月の報告文において、正しく書くことができていた児童の割合は78.6%であったが、9月の報告文では85.8%の児童が正しく書くことができており、使用前よりも7.2ポイント増加していることがわかった。これは、系統的なワークシートを使用したことにより、書く際に主語と述語の4つの型を意識して書く事ができたのだと考えられる。

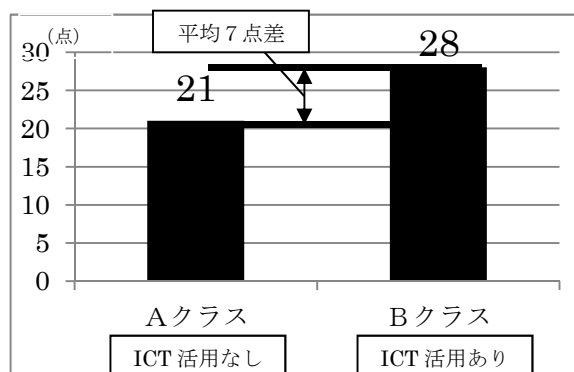


図12 9月の報告文「中（配点30点）」の平均点

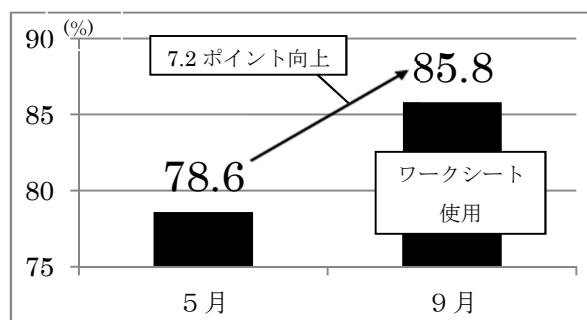


図13 報告文における「主語と述語」の正答率

IV 成果と課題と今後の対応

1 成果

- (1) 提示用デジタル教材を用いて、比較・検討すべき2つの文章を視覚化・焦点化し、話し合いを行ったことで、「問い」と「答え」が対応した文章構成の報告文を書くことができた。
- (2) 提示用教材をデジタル化したことで、提示物の切り替えや、視覚化・焦点化する時間が短縮され児童が比較・検討し、考えを共有するための活動時間を確保することができた。
- (3) 系統的なワークシート教材を開発することができた。これに繰り返し取り組んだことで、主語・述語の正しい関係を意識しながら文章を書く児童が多く見られるようになった。
- (4) 導入においてスモールステップ教材を使用し、操作させることで本時の文章構成に必要な文と文との関係についての理解を深めることができた。

2 課題と今後の対応策

- (1) 授業の展開部分で、話し合いの論点が相違する場面がみられた。電子黒板の機能を生かした提示方法の工夫を図ると共に、黒板と電子黒板を併用した効果的な板書計画を立てる。
- (2) 個々で思考する場面で、課題が捉えられずに戸惑いを見せている児童がいた。課題とその解決の視点をもたせる為のデジタルコンテンツの提示時間や提示の順序の改善を図る。

〈参考文献〉

- 沖縄県教育委員会 平成 25 年 『わかる授業 Support Guide』 沖縄県教育委員会
桂聖／小貫悟 編著 2013 年 『説明文授業のユニバーサルデザイン』 東洋館出版社
桂聖編著 2013 『教材に「しかけ」をつくる国語授業 10 の方法』 東洋館出版社
白石範孝 2013 『白石範孝の国語授業の技術』 東洋館出版社
白石範孝 2013 『読解力がつく白石流「要点・要約・要旨」の授業』 学事出版
白石範孝編著 2013 『国語授業を変える「用語」』 文溪堂
中川一史 2013 『ICT で伝えるチカラ 50 の授業・研修事例集 小学校全学年対応』 フォーラム・A
筑波大学附属小学校編著 2012 『国語授業のつくり方』 東洋館出版社
赤木かん子 2012 『本で調べてほうこくしよう』 株式会社ポプラ社
倉島保美 2012 『論理が伝わる書く技術』 講談社
水戸部修治 2012 『教科調査官が語るこれからの授業 小学校』 図書文化社
沼澤清一編著 2012 『新国語科・言語技能を磨くワーク 上・下巻』 明治図書
沖縄県教育委員会 平成 23 年 『「確かな学力の向上」支援プラン』 沖縄県教育委員会
白石範孝編著 2011 『3 段階で読む新しい国語授業』 文溪堂
桂聖 2011 『国語授業のユニバーサルデザイン』 東洋出版社
松野孝雄 2010 『論理的な記述力を伸ばす授業づくり』 明治図書出版社
大越和孝／成家亘宏／藤田慶三編著 2010 『「書くこと」の言語活動例の展開』 東洋館出版社
高木展郎 2008 『各教科等における言語活動の充実 その方策と実践事例』 教育開発研究所
文部科学省 平成 20 年 『小学校学習指導要領解説 国語編』 株式会社東洋館出版社
市毛勝雄 2007 『論理的文章の書き方指導 小学校編』 明治図書出版株式会社

〈参考 URL〉

- Cordrops 『3D BOOK SHOWCASE』
<http://tympanus.net/codrops/2013/01/08/3d-book-showcase> 2014 年 2 月 18 日アクセス
Dave Furfero 『Touch Punch』
<http://kachibito.net/web-design/jquery-ui-touch-punch.html> 2014 年 2 月 18 日アクセス
KJ 『Booklet』
<http://phpspot.org/blog/archives/2013/02/uijquerybooklet.html> 2014 年 2 月 18 日アクセス
Sky 株式会社 『教育における ICT 活用の現状とこれから 中川一史』
<http://www.sky-school-ict.net/shidoyoryo/nakagawa/> 2014 年 2 月 18 日アクセス
Sky 株式会社 『教科指導におけるデジタル教材活用のポイント 中川一史』
<http://www.sky-school-ict.net/icthint/kyoukashidou/> 2014 年 2 月 18 日アクセス
The jQuery Team 『jQuery』
<http://jquery.com/> 2014 年 2 月 18 日アクセス
NTT 東日本 『教室における ICT 機器利活用の現状と展望 中川一史』
<http://www.ntt-east.co.jp/business/magazine/edu/004/disucussion1/01.html>
2014 年 2 月 18 日アクセス
Vanilla 『Cool Web window』
<http://www.coolwebwindow.com/template/public.php> 2014 年 2 月 18 日アクセス
WEB 原色大辞典 『WEB 原色大辞典』
<http://www.colordic.org/> 2014 年 2 月 18 日アクセス
アルファシス 『複数リストの Draggable 境界越え』
<http://alphasis.info/2011/06/jquery-ui-sortable-connectwith/> 2014 年 2 月 18 日アクセス
株式会社 Wimp MIYA 『imgPreview』
<http://www.css-lecture.com/log/javascript/034.html> 2014 年 2 月 18 日アクセス
ポンクソフト 『Draggable を使って付箋(sticky)、ドラッグ可能なポップアップなど』
<http://ponk.jp/> 2014 年 2 月 18 日アクセス